2026 年 11 月 8 日　聖霊降臨後第 24 主日（マタイ 25：1〜13）

> だから、目を覚ましていなさい。あなたがたは、その日、その時を知らないのだから。　（マタイによる福音書 25 章 13 節）

今日は 10 人のおとめのたとえばなしが読まれました。このおとめたちは、花嫁の付添人だったようです。彼女たちは花婿が花嫁を迎えに来るのを待っていて、そして花婿が来たら花嫁と一緒に婚宴会場に向かう。そのような習慣があったようです。

ところが、花婿は待てど暮らせど到着しません。おとめたちはだんだん眠くなっていきます。そしてみな、眠気に負けて眠り込んでしまうのです。真夜中になり、花婿が到着しました。彼はすぐに出かけようとします。

ここで 10 人のおとめは、5 人と 5 人に分けられるのです。すなわち、「賢いおとめ」と「愚かなおとめ」です。愚かなおとめがともし火だけを持っていたのに対し、賢いおとめは油も用意していた。つまり予備のものをしっかりと準備していたのです。

わたしは多分、いろんなことに対する準備をすごくする方だとは思いますが、聖書はそのようなことを言っているのでしょうか。予備の油をいつも持っているような、そのような準備万端の人間でありなさいということでしょうか。

そもそもこの物語を読んでいて、なぜ「賢い」とされるおとめは、「愚かだ」とされるおとめたちに対して油を分けてあげなかったのだろうか。油が足りなかったとしても、自分のあかりで隣の人の足元を照らすことはできなかったのだろうか。そのような、隣人愛や奉仕のような観点でこの物語を読んでいくと、少し違った方向にいってしまうかもしれません。実は今日、ここでイエス様が問われているのは、「あなたはどっちなのか」というその一点なのです。

今日のたとえ話で、賢いおとめは 5 人、愚かなおとめも 5 人でした。例えば迷える羊のたとえでは、100 匹のうち迷子になったのはたった 1 匹でした。またイエス様はこうも言われています。「狭い門から入りなさい。滅びに通じる門は広く、その道も広々として、そこから入る者が多い。しかし、命に通じる門はなんと狭く、その道も細いことか。それを見いだす者は少ない」。

たとえば賢いおとめが 9 人で愚かなおとめが 1 人であれば、わたしたちはこう考えてしまいます。「きっとその追い出される一人は、あの人に違いない」って。逆に賢いおとめが 1 人で愚かなおとめが 9 人なら、わたしたちはこう考えるでしょう。「わたしには無理かもしれないな」と。その考え方がどうなのかということはさておき、この 5 人と 5 人というのがポイントなんですね。つまりわたしたちは、自分の選択、自分の思いによって、最後の最後、どっちに転ぶかが決まるのです。その選択を間違えたらいけないよということなのです。

イエス様は今日の最後の部分で、このように言われています。「だから、目を覚ましていなさい。あなたがたは、その日、その時を知らないのだから」。でもこの言葉、何だかおかしくないでしょうか。5 人の賢いおとめたちがずっと夜中じゅう起きていたかというと、そうではありません。彼女たちも眠り込んでいました。ということは「目を覚ます」とは、肉体的に起き続けていることではなさそうです。そうではなく、希望をもって待ちわびる。たとえ肉体は休んでいたとしても、心はいつも燃えている、そのようなことだろうと思います。

この前の金曜日、20 数名でリトリート旅に出かけました。こ

れまで徳島、小浜、菰野、長島、そして今回の宮津と回を重ねてきました。わたしはそのうちの三回で、工程などの準備からおこなってきましたが、そこで大事にしたいと考えているのはそこにいる方々との出会いです。今回、宮津聖アンデレ教会で昼の祈りをささげました。現在この教会には信徒の方がおらず、それでも管理をしている藤原司祭は月一回、丁寧にお掃除をされているそうです。聖堂に響き渡る歌声は、それこそ数十年ぶりのボリュームだったそうです。また続いて行ったカトリック宮津教会では、当初地区代表の信徒の方の説明を聞く予定でしたが、せっかくだからと神父さんが来て下さり、たくさんのお話をしてくださいました。その聖堂は二年前に重要文化財になったばかりということもあり、バスの時間が気になるほど、お話が尽きませんでした。そのカトリックの教会も、信徒数の減少と高齢化によってミサの回数が減り、主日に聖餐式がないことも多くなったそうです。ただ同じクリスチャンとして、主の交わりの中にあることを感じ、終始笑顔で語りあえたことが、とても素晴らしかったと思います。

建物を見学することも大切です。その当時にどんな人がどのような思いで建築に携わっていたのか、それを見、使っていった人たちが、どのように信仰を育てられたのか。とても心に伝わってきます。それと同時に、それぞれの地で福音を宣べ伝え、たくさんの困難を抱えながらも懸命に歩んでいる人たち。そのような人と出会うこともとても大事なんですね。そのお一人お一人の信仰によって、わたしたちの信仰の火がまた燃やされる。そういうことなのです。

その信仰の火を燃やす油は、出会いによってその相手から与えられるのではありません。油を与えてくださるのは、あくまでも神さまです。出会いによってわたしたちが喜びや笑顔で満たされるとき、わたしたちの心の中には神さまからの油が満ち満ちるのです。

今日のたとえばなしに出て来たおとめたちが持っているともし火、それは自分でしか管理できないものです。周りの人がいくら油をわけてくれたとしても、自分自身の油が無ければ、その炎はすぐに消えてしまうのです。イエス様が言われていること、それはわたしたちの心を、その油で満たしなさいということではないでしょうか。それでは神さまからの油、それは何でしょうか。愛、恵み、賜物、いろいろあると思います。

その神さまから与えられるものを、心に素直に受け入れなさい。それが今日のイエス様のメッセージなのです。自分の力に頼って神さまから与えられるものを拒否したり、自分を正しい者と考え神さまを否定したりすること、それは愚かなおとめと同じだよと。一番大切な時に、それではともし火が消えてしまうよと。そうではなく、賢いおとめのように、心をいつも神さまからいただいたもので満たしておきなさいということなのです。神さまに頼るか、自分に頼るか、それは、自分でしか決めることができません。その決断を、わたしたちは求められているのです。簡単なことです。神さまを受け入れる、それだけのことなのです。

わたしたちの心は、神さまからの油で満たされているでしょうか。そしてその信仰は、燃えているでしょうか。笑顔でたくさんの人と出会い、語りあい、共に食卓を囲むとき、そこには神さまの愛が満たされます。

そのように歩むわたしたちとされますように、これからもお祈りを続けてまいりましょう。